

W、第二問答

まず問、「余行を勧進するものはないのだろうか。」これに対する答に三義ある。

1 因明直弁―諸行は専ら往生の為には説かず、念仏は往生の為に撰んで説く。

2 自説不自説―諸行は阿弥陀如来が自ら修すべしとは説かれなかった。念仏は阿弥陀仏が我が名を念ずべしと説かれた。

3 撰取不撰取―諸行を行ずるものは仏の光明に撰取されない。念仏を行ずるものは仏の光明に撰取される。

略料簡(十七頁)料簡(十四頁)には「善導の専修雑行の文を

もって指南」「善導に帰すべし」と善導とのみあって道綽の名はない。しかるに正徳版の略料簡には「善導道綽を以て指南とす」とあって、本釈と同様、導、綽二師の名をあげている。

3 道綽の安樂集により聖浄二門により仏教を釈す。

4 次に善導の『観経疏』(名のみ)をあげる。(Yの往生階位では、善導からの引文は『礼讃』(四ノ三五六)からの専雑二行の文であって、『観経疏』の文ではない。またこの道綽の聖浄二門と善導の『観経疏』のことは古本の略料簡、料簡、詮要にはないが、正徳版の略料簡にはあげてある。)

X、第三問答

問う。諸経の所説は機に随って万品であるのになぜ一文に執するのか。この答の中に一義がある。諸行は釈迦如来が衆生の機に随って説かれたもの。念仏は四依の菩薩が理を尽して勧められたもの。だから念仏が『要集』の本意である。

Y、第十問答料簡門第二往生階位からの文。

Z、右の私釈

1 恵心は道綽善導をもって指南としている。

2 恵心に随うものは必ず道綽善導に帰すべし。(但し、古本の

第一の持戒不犯を往生の要とするのは、『要集』に「護三業」とあるからである。持するところの戒は、菩薩戒であって声聞戒ではない。また菩薩戒には十重、四十八軽があるが、ここでは軽を捨て重を取る。故に「三業重悪」とある。(L6参照)

第一問答の結論

この『要集』の意に従って往生をとげんとするものは、まず縁事の大菩提心を発し、次に十重木叉を持して、深信と至誠をもって常に弥陀の名号を称して、願に随って往生を得べきである。これが『要集』の正意である。

S、第二問答

第七惣結要行には二つの問答があげてある。第一の問題については以上で述べた。ここでは第二の問答について考えてみよう。

ここでは七種助念について、これらが往生の要である理由を述べている。(L34参照) 文は解り易いので繁雑になることを恐れて、ここでは解釈をしない。

また上の厭離、欣求、極樂証拠、正修、助念の五門の要否についてはすでに述べた。(R1参照) 下の別時、念仏利益、念仏証拠、往生諸行、問答料簡の五門の至要でないこともこれによって自から判るところである。

また念仏には二つある。但念仏と助念仏である、但念仏は第四正

修念仏門の意であり、助念仏は第五助念方法門の意である。『要集』の意は助念仏をもって決定往生の業とするのか。善導の意はそうではないようだが。

T、TからZまでは「要」。

念仏の一行に約して勸進する文として三つあげている。第四正修念仏門の觀察門、第八念仏証拠門、第十問答料簡門の往生階位からの文をあげ、第四門の觀察門の文のみ原文のみ、他の二文にはそれぞれ私訳がほどこされている。

Tは第四正修念仏門の觀察門からの文。

U、UからXまでは第八念仏証拠門に関するもの、Uは第八門からの文。

V、VWXは第八門の三つの問答。

Vは第一問答で、問に「何が故に、唯念仏一門を勧るか」とある「唯勧」というのは、觀察門の中の「行住坐臥」などの文(十五ノ八五下)を指すものである。慇懃に勸進するのはこの觀察門に見えるものであって、他のところでは見えないのである。次に答の中に二義ある。

- 1 難行易行―諸行は難、念仏は易
- 2 少分多分―諸行勸進文は少く、念仏勸進文は多い。

は答の文を釈す。ここは第一の答の意を述べる部分である。その意というものは、すでに上の諸門の中に要行と不要行が示されているので、その中の要行を示すことである。

R、第一問答の答の二

ここは答の文を釈する部分で、これはさらに二つに分けて論じられる。一は惣結五門、二は別約二門である。

1 惣結五門

上の五門（P参照）の中、厭離門、欣求門、証拠門の三門は往生の要ではないので、これを簡んで取らず。正修門と助念門の二門は正しく往生の要行であるのでこれを取る。七法（大菩提心護三業等）はこの中に示されているといふのである。

大菩提心、念仏―第四正修念仏門

護三業、深心、至誠、常、隨願―第五助念方法門

2 別約二門

往生の要としての二門、即ち第四、第五の両門についてさらに往生の要非要を考える。

第四正修念仏門（五念門）

第三作願、第四觀察―往生要

第一禮拜、第二讚嘆、第五回向―往生非要だから七種助念の中にも菩提心と念仏といって、禮拜等はあげていない。しかるに菩提心の中には事と理がある。これについて文の中には何もいっていないが、念仏から判断すれば、事の菩提心が往

生の要と考えられる。念仏についていえば、これは觀察門の異名である。また念仏の中には觀察と、称念名の二つがあるが、ここでは称名をもって要とする。だから文の中に「称念仏はこれ行善なり」とある。このことから『要集』の本意は称名念仏をもって往生の至要とするのである。（Lの510参照）

第五助念方法門

第二修行相貌、第四止惡修善―往生要

第一方処供具、第三対治懈怠

第五懺悔衆罪、第六対治魔事―往生非要

第二修行相貌について四修三心あり、四修の中

無間修――往生要

長時修、愍重修、無余修―往生非要

（典故）「西方要決」（浄全六ノ六〇五）からの文

「謂^ク常^ニ念^メ念^メ作^シ往生^ノ心^ヲ……」

三心―全て往生の要

第四止惡修善

持戒不犯――往生要

不起邪見、不生憍慢、不恚不嫉、勇猛精進、誦誦大乘

――往生非要

ところで観察門の中には観念と称念があるが、いずれが正しいかというに、それは称念であるという。その典拠は第五助念方法門の第七総結要行の中に「称念仏はこれ行善なり」とあるからである。（「念仏」は第四大門、第五大門の二門によりその真意を称念としている。）

11 「随願」は右の三心の中の廻向発願心を指す。

M、七種助念は「要集」の正意ではない。

以上問答によってどれが往生の要であり、どれが往生の要ではないかをあげたわけであるが、詮ずるところ、ここにあげたものは助念方法門の心であって、要集の正意ではない。

N、七種助念が正意でない理由。

それは第五助念方法門第四止悪修善（十五ノ一〇三下）の中に説かれていた。

問、念仏すれば罪は自然に滅するので、必ずしも持戒は必要ではないではないか。

答、一心に念ずればその通りである。然るに一日中念仏しても、静かに現実の自己を眺めてみると、淨心の念仏はごくわずかで、あとすべてけがれている。―中略（野生の鹿をつないでおくのはむづかしく、家に飼っている犬はよく馴れている。まして、自分の心をかけてにさせておくと、どれほどの悪をすることだろうか― cf 花山、四四二）―だから精進して戒を保つことは大切な宝をま

もるようにすべきである。（ひるがえって間に示されているところを見れば、念仏により罪が自然に消滅されるのであるから）説の如く念仏すれば、必ずしも持戒等を具する必要はないのである。

O、OからSまでは、再び第五助念方法門第七総結要行に関するもの。

O、要行の全文。これはKにおけるものよりも長文である。

P、私積、第一問答の間

第七惣結要行は『要集』の肝心であり、決定往生の要法である。

（「要集の正意にあらず」―M―参照。）この要行には二つの問答がある。Pでは第一問答の中の問いに関するものである。これはLの123にもあげてあるものである。要約すると次の如くである。

1 「上諸門」とは上の五門（厭離穢土門、欣求淨土門、極樂証契門、正修念仏門、助念方法門）を指す。

2 「所陳既多」とは、厭離門七章、欣求門十章、証契門二章、正修門五章、助念門六章、これらの諸章にあかすところがすでに多いことを指す。

3 「未知何業為往生要」とは、上の諸門に述べるところが多いので、いずれが往生の要か否かを問うことである。

Q、第一問答の答の一。

答はさらに二つに別けられる。一つはほぼ答の意を述べ、二つに

6 引例勸信

7 悪趣利益

第八念仏証拠門

三重問答

第九往生諸行(業)門

第十問答料簡門

1 極樂依正

2 往生階位

3 往生多少

4 尋常念相

5 臨終念相

6 鹿心妙果

7 諸行勝劣

8 信毀因縁

9 助道資縁

10 助道入法

K、KからSまでは「略」。

K、略とは第五助念方法の中の第七の惣結要行の法である。典拠として「問、上諸門中……決定生極樂」(十五ノ一〇八上)と七種助念を含んだ部分のみが引用してある。(二の総結要行の文は後のOにおいても引用されている。そこでは全文が引用され私釈がほどこされている。)

L、右の文の私釈。

各語句の私釈は次の段落(P)でもなされる。

1 「上諸門」とは厭離等の五門(第一厭離穢土門から第五助念方法門まで)を指す。

2 「所陳既多」とは、Jにおいて見える如く、厭離門に七、欣求門に十、証拠門に二、正修門に五、助念門に七が説かれる如く、多く述べられているということ。

3 「未知何業為往生要」とは、この中どれが往生の要となるかとの問い。

4 答として「七法を往生の要とする」。上の五門の中、厭離門、欣求門、証拠門の三門は、往生の要ではないので、これらは捨てる。七法について以下に示す。

5 「大菩提心」は第四正修念仏門(五念門)の中の作願門をさす。

6 「護三業」は第五助念方法門の第四止悪修善(十五ノ一〇〇)の中の止悪を指す。ところで止悪の中には、十重四十八軽があるが、両方ともこれに含まれるかというに、そうではなく十重のみをとる。それ故に、この総結要行に「三業の重悪、よく正道を障ふ、故にすべからくこれを護るべし」(十五ノ一〇八)とある。

7 「深信」は第五助念方法門第二修行相貌(十五ノ八八下)の中四修三心を説く中、三心の中の深信を指す。

8 「至誠」は右の三心の中の至誠心を指す。

9 「常」は右の四修の中の無間修を指す。

10 「念仏」は第四正修念仏門(五念門)の中の觀察門をとる。と

4 阿修羅

5 人

6 天

7 惣結

大叫喚

焦熱

大焦熱

無間

第二欣求門

1 聖衆來迎樂

2 蓮華初開樂

3 身相神通樂

4 五妙境界樂

5 快樂無退樂

6 引接結緣樂

7 聖衆俱會樂

8 見仏聞法樂

9 隨心供仏樂

10 增進仏道樂

第三極樂証觀門

1 對十方

2 對兜率

第四正修念仏門

1 礼拝門

2 讚嘆門

3 作願門

4 觀察門

5 廻向門

緣事四弘誓願

緣理四弘誓願

別想觀

惣相觀

雜略觀

雜略觀

極略觀

第五助念方法門

1 方所供具

2 修行相貌

長時修

愍重修

無間修

無余修

至誠心

深心

廻向発願心

3 對治懈怠

4 止惡修善

5 懺悔衆罪

6 對治魔事

7 惣結要行

持戒不犯

不起邪見

不生憍慢

不恚不嫉

勇猛精進

誦誦大乘

第六別時念仏門

1 尋常行儀

2 臨終行儀

第七念仏利益門

1 滅罪生善

2 冥得護持

3 現身見仏

4 當來勝利

5 弥陀別益

2 正宗分「大文第一—※宝性論偈」

※浄全所収(第十五卷)『往生要集』には「宝性論偈」はない。

3 流通分 下巻内題奥 七言四句偈

(金沢文庫本、良聖手澤加點本には「助念、別時」が付加されている—昭法全、一八頁)

G、章門開合

1 開—十門(『要集』は開けば十門)

2 合—五門(『要集』は合すれば五門)

① 第一厭離穢土門

② 第二欣求浄土門(この中に第三極楽証拠門を含む)

③ 第四正修念仏門(この中に第五助念方法門、第六別時念仏門、第七念仏利益門、第八念仏証拠門の四門も含む)

④ 第九往生諸行(業)門

⑤ 第十問答料簡門

H、右の章門開合の中、合に関連して二つの問答を出す。

第一問答

問、第三極楽証拠門を第二欣求浄土門に入れたのはなぜか。

答、第三極楽証拠門は、第二欣求浄土門の疑を釈したものである。十方、都率に対して西方の一義を釈成したものである。故に一門とする。

第二問答

問、第五・第六・第七・第八の四門を第四正修念仏門に入れたのはなぜか。

答、正助・長時・別時・修因得果の義によって一往五門(第四門以下第八門まで)に開いたが、諸行(門)に対してこれら五門みな念仏を説いているので、一門に合した。

その典拠として、序文、第八門、第九門よりの文をあげる。

序文の中の「一門」とは一部十門の中念仏を指して念仏一門という。これは諸行に対していう言葉である。

第八門の中の「一門」とは正修念仏以下の四門を指す。これもまた諸行に対する一門である。

第九門の中の初めの「念仏」とは「一門」とはでないが、正修念仏以下の五門を指しているものであって、これもまた諸行に対する念仏である。

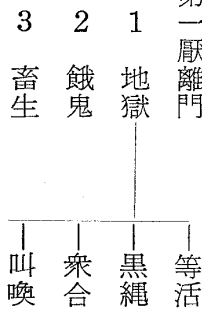
I、I Jは「広」

ここからは『要集』を「広略要」の三面から論ずる部分である。

Iは広について、これは一部三巻、序正流通十門をいうのである。

J、十門

第一厭離門



二、『往生要集』の概要

『往生要集』は大きく二つに分けることができる。

1 諸経論を釈する方法に準じて、大意・釈名・入文解釈の三門に分けて論ずる部分。(A—H)これは正徳版『往生要集大綱』に相当する部分である。

2 『要集』を広・略・要の三面から論ずる部分。(I—Z)これは正徳版『往生要集略料簡』を全て含み、さらに一部を追加したものである。(対照表参照)

以下ABC……XYZ順に要点を見ることにする。

A、大意

法性は平等であって元来淨穢というものはないが、人間は染淨緣起、因縁仮有を離れることができないので、仏は厭穢欣淨を勧められた。しかし、厭穢欣淨といってもただ空しくこれを求めるだけでは、これを成就することはできない。そこには行が必要である。そこで行として念仏をあげ、この念仏を修して往生を願求することを勧めるのである。

B、BCDEは釈名。

Bはまず「往生」に関するもの。「往生」とは捨此往彼蓮華化生(「正徳版」)、草菴で目を閉じた時弥陀仏(菩薩衆—「正徳版」)

に従い西方極樂淨土の蓮華台に生ずることである。

C、「要」に関するもの。

「要」とは『要集』の中には念仏と諸行が説かれているが、諸行を要とせず、念仏を往生の要とするという意味である。次にその典拠があげてある。

D、その典拠

1 序文からの文

2 第八念仏証拠門からの二文

3 正徳版ではこの他に第五助念方法門第七総結要行の「往生之業念仏為本」(淨全十五ノ一〇八上)の文をあげている。(淨全九ノ三七三下)

E、「集」に関するもの。

「集」とはこの書が諸経論より念仏往生の文を撰集したものであることを意味する。

F、FGHは入文解釈。

これは①分別三段と②章門開合の二意に大別され、さらに章門開合は二つの問答に分けて論じられている。Fは分別三段で、『要集』を三つに分けている。

1 序文「夫往生極樂—備於廢忘」

Z	Y	X	W	V
<p>師安樂集、覽之、分三聖道淨土二門、仏教ヲ積スル見之、次善導觀經疏見之矣。(二六)</p>	<p>如上等者指三禮拜等、五門至誠等、三心長時等、四修也。(二六)</p>	<p>往生階位云。問。若凡下輩得往生、云何近代於彼國土求者千万、得無一二。答。綽和尚云。信心不深、若存若亡。故信心不深、不決定。故信心不三相統、余念間。故此三不三相應者、不能往生。若具三心不往生者、無是是。善導和尚云。若如上念々相統、畢命為期者、十即十生、百即百生。若欲三拾專以修雜業者、百時希得二二、千時希得三三五。</p>	<p>之、念仏仏光撰取之。(二六)</p>	<p>謂諸行勸進文甚少、念仏諸經多勸進之。(二五)</p>
○12	△11	○10	○9	○8
17	16~17	16	16	16
△15	○14	○13	○12	○11
14	13~14	13	13	13
	△10	△9	△8	△7
	7	7	6~7	6
△14	○13	○12	○11	○10
378	378	378	378	378
	△10	△9	△8	△7
	382	382	381~382	381
	<p>30. 一三八下 ※ 「往生禮讚」 淨全四ノ 三五六下</p>	<p>※「安樂集」 卷上、淨全 上ノ六九〇</p>		

U

食自然、常受三安樂。若復能滿二百萬劫者、當得除斷百八結業、背生死流轉、趣涅槃道、獲無上果。略抄感禪師意同之。況復諸聖教中以念仏為往生業。其文甚多。略出二十文。一占察經下卷云。若人欲生他方現在淨國者、應下當隨彼世界仏之名字、專意誦念、一心不乱。如上觀察者、決定得生彼仏國、善根增長速成不退。法身或自身本來無二不生不滅常樂我淨功德。如満又觀自身無常、如幻可厭等也。二双卷經三輩業、雖有淺深、然通皆云一向專念無量寿仏。三四十八願中、於念仏門別發二願云乃至十念若不生者不取正覺。四觀經極重惡人。云五同經云。若欲至心。云六同經云光明遍照。云七阿弥陀經云。不可以少善根。云八般舟經云。阿弥陀仏言。欲來生我國者。云九鼓音聲經云。若有衆生。云十往生論云。觀念彼仏依正功德為往生業。云此中觀經下品。阿弥陀經、鼓音聲經、俱以念仏名号為往生業。何況觀念相好功德耶。問。余行寧無勸進文耶。答。其修行法、因明彼法種々功德、自說往生之事。不如下直辨往生之要、多云中念仏。何況仏自唱言當念我名乎。亦不云仏光明撰取余行人。此等文分明、何重生疑乎。問。諸經所說、隨機万品、何以管見執一文耶。答。馬鳴菩薩大乘起信論云。復次衆生、初學此法、其心怯弱、畏信心難成就、意欲退者、當知、如來有勝方便、撰護信心。隨心專意念仏因縁、隨願得往生他方淨土。如修多羅說、若人專念西方阿弥陀仏、所作善根廻向願求、生彼世界、即得往生。明知、契經多以念仏為往生要。若不爾者、四依菩薩即非理歟。(二四—二五)

○7

15—16

○10

12—13

○9

377—378

29. 一二八下
一三〇

	T	S
<p>又念仏証掘門問云。一切善根各有利益、各得往生、何故唯勸念仏一門。答。勸念仏、非是遮余種々妙行、只是男女貴賤、不簡修行住坐臥、不レ論二時処諸緣、修レ之不レ難。乃至臨終願求往生、得其便宜、不如念仏。故木棹經云。難陀国波瑠璃王、遣使白仏言。唯願世尊、特垂慈怒、賜我法、使下我。日夜易得修行、未來世中遠離衆苦。仏告大王。若欲滅煩惱障報障者、當下貫木棹子百八、以常自隨。若行若住、若坐若臥、恒常至心、無分散意、称念仏陀達磨僧伽名、乃至過一木棹子。如是若十若千、乃至百千萬億。若能滿二十万返、身心不亂、無諸謠曲者、捨命得生第三炎魔天。衣</p>	<p>三業者、約念仏一行勸進文是也。第四正修念仏門之中、觀察門云。初心觀行不堪深奧。乃至是故可修色相觀。此分爲三。一別相觀、二惣相觀、三雜略觀也。隨意樂應用之。初別相觀者。云、二惣相觀者。云、三雜略觀者。云。若有不堪觀念相好、或依壽命想、或依引撰想、或依往生想、应一心称念。已上意樂不同ナルガ故明二種々觀。行住坐臥、語默作々、常以此念在於胸中、如飢念食、如渴念水。低頭拳手、或拳声称名。外儀雖略、心念常存、念々相統寤寐莫忘。云(二四)</p>	<p>次又有問答、以菩提心等七法為往生要、問答其由也。其文易見、恐繁不記。又於上厭離等五門、簡要否、既以如此。下別時等五門、亦非至要、以之可知。又於念仏有二。一但念仏前正修門意也。二助念仏、今助念門意也。此要集意、以助念仏為決定業。但善導和尚御意不爾云。(二三一二四)</p>
	△ 2	
	14—15	
	△ 2	○ 7
	10	12
	△ 6	○ 14
	5	10
	○ 8	○ 7
	377	376
	△ 6	
	380	
	28. 七九上— 八五下	

R

正是往生要行。故答中云三。大菩提心護三業等。大菩提及念仏者、是則第四門也。護三業深信至誠等者、第五門也。是則約諸門一舉其要、簡其要否也。次別約三二門簡者、又有二。一約第四門簡之。二約第五門簡之。初約第四門者、就之亦有五門。一禮拜門、二讚嘆門、三作願門、四觀察門、五廻向門也。此五門中以作願觀察二門為往生要。余三門是非要故、今云三菩提心及念仏、又更不云三禮讚等。又就三菩提心有理事有理。文中雖未簡之、若例念仏、且以事為往生要也。又云念仏者、是觀察門異名也。然於念仏行、又有觀想有称名。於三行中、称名為要。故次答中称念仏是行善。云以之往生要集意以称念仏為往生至要也。次約第五門者、就之又有六。一方處供具、二修行相具、三对治懈怠、四止惡修善、五懺悔衆罪、六对治魔事也。此六法中、以第二第四二門為往生要。第一第三第五第六四門非往生要。故捨而不取也。就第二門、又有四修、有三心。四修者、一長時修、二愍重修、三無間修、四無余修也。於四修中、唯取無間修為其要、余三非要也。故文引三要決云。三無間修、謂常念仏作往生想。於三心、全取不棄、皆是往生要也。故文云深信至誠常念仏及隨願、則是意也。次就第四門亦有六。一持戒不犯、二不起邪見、三不生憍慢、四不恚不嫉、五、勇猛精進、六、誦誦大乘。於六法中、唯取第一為往生要。文云護三業。要者是則持戒不犯也。余五非要故棄而不取也。所謂戒者、是菩薩戒、非声聞戒。其旨見文。但於菩薩戒、亦有十重、有三四十八輕。今意捨輕取重。故文云三業重惡情。案此問答、依此要集意欲遂往生者、先發緣事、大菩提心。次持十重木叉、以深信至誠、常称弥陀名号、隨願決定得往生。是則此集正意也。(一一一—二三)

○6

11—12

○13

9

○6

376

24. 一〇八上

26. 一〇八上
25. 八八下

27. 一〇八上

Q	P	O
<p>次正積ニ答文ニ者、又分為レ二。一惣約ニ五門ニ簡之、二別約ニ二門ニ簡之。初惣約ニ五門ニ簡者、上厭離等三門、是非ニ往生要ニ故簡而不レ取、第四第五二門、</p>	<p>私云。此第七惣結要行者、是則此集肝心也。決定往生要法也。學者更思三択之、可レ識ニ其要否。文有三問答。且初問中、上諸門者、上有ニ五門。一厭離穢土、二欣求淨土、三極樂証拠、四正修念仏、五助念方法。故指レ此等ニ云ニ上諸門一也。次所レ陳既多者、厭離門有レ七。欣求門有ニ十章、証拠門有ニ二章、正修門有ニ五章、助念門有ニ六章。此等諸章所レ明既多、故云ニ所陳既多ニ也。次未レ知何業、為ニ往生要ニ者、於ニ上諸門ニ各所レ述行既有ニ条数。於ニ要否法、學者臣レ識、為レ決ニ要法ニ故云レ未レ知也。(一一)</p>	<p>第七惣結要行者、問。上諸門中、所レ陳既多、未レ知何業、為ニ往生要ニ。答。大菩提心、護ニ三業、深信至誠常念仏、隨レ願決定、生ニ極樂。況復具ニ余諸妙行。問。何故此等、為ニ往生要ニ。答。菩提心義、如ニ前具釈。三業、重惡能障ニ正道、故須レ護レ之。往生之業、念仏為レ本。其念仏心、必須レ如レ理。故具ニ深信至誠常念三事。常念有三益。如ニ迦才云。一者諸惡覺觀畢意不レ生、亦得レ消ニ於業障。二者善根增長、亦得レ種ニ見仏因緣。三者薰習熟利、臨ニ命終時、正念現前已上。業由レ願轉。故云ニ隨願往生。惣而言之、護ニ三業、是止善、稱ニ念仏、是行善。菩提心及願扶ニ助此二善。此等法、為ニ往生要。其旨出ニ經論。不レ能レ具レ之。(一一二)</p>
○5	○4	○3
○12	11	10—11
8—9	○11	
	8	
○5	○4	○3
375~376	375	375
		23. 一〇八上

N	M	L	K
<p>念仏必不可具持戒等。以此言略也。(二二)</p>	<p>此尚准問雖尋要否、是且助念門意也。非此集正意也。(二二)</p>	<p>私云。問意者、上諸門者、指厭離等五門也。所陳既多者、厭離有七、欣求有十、証掘有二。正修有五、助念有七。如是諸門中、所陳既多。未知何業為往生要問也。答意者、且准問撰七法以名往生要也。上五門中、厭離欣求証掘三門非要、故捨不取。大菩提心者、上正修念仏門中有五念門、其中取作願門也。護三業者、上止惡修善中取止惡也。問。止惡中有二十重四十八輕、共取之數。答。不然、正取十重也。故下文云。三業重惡能障正道、故須護之、是也。深信者、上修行相良中有四修三心、三心中取深心也。至誠者、取至誠心也。常者、四修中取無間修也。念仏者、上五念中取觀察門也。問。觀察門中有三称念、有観念、正何念乎。答。取三称念也。故下文云。称念仏是行善也。隨願者、上三心中取廻向發願心。故云。大菩提心護三業深信至誠常念仏隨願決定生極樂。(二〇二一)</p>	<p>又略者、助念方法中惣結要行七法是也。文云。問。上諸門中、所陳既多。未知何業為往生要。答。大菩提心、護三業、深信至誠常念仏、隨願決定生極樂。已上(二〇)</p>
<p>○6</p>	<p>○5</p>	<p>○4</p>	<p>○3</p>
<p>15</p>	<p>15</p>	<p>15</p>	<p>15</p>
<p>○9</p>	<p>○8</p>		
<p>12</p>	<p>12</p>		
<p>22. 二〇二下</p>		<p>21. 一〇八上 20. 八九下 19. 一〇八上 18. 七九上 17. 八八下 16. 八九下 15. 八九下 14. 一〇八上 13. 一〇〇上 12. 六九下</p>	<p>11. 一〇八上</p>

J

念方法、六別時念仏、七念仏利益、八念仏証拠、九往生諸業、十問答料簡也。(一九)

初就三厭離有レ七。一、地獄、二、餓鬼、三、畜生、四、阿修羅、五、人、六、天、七、惣結也。就三、地獄有レ八。一、等活、二、黑繩、三、衆合、四、叫喚、五、大叫喚、六、焦熱、七、大焦熱、八、無間也。欣求有レ十。一、聖衆來迎樂、二、蓮花初開樂、三、身相神通樂、四、五妙境界樂、五、快樂無退樂、六、引攝結緣樂、七、聖衆俱會樂、八、見仏聞法樂、九、隨心供仏樂、十、增進仏道樂。次極樂証拠有レ二。一、對十方、二、對都率。次就三正修有レ五。一、禮拜門、二、讚嘆門、三、作願門、四、觀察門、五、廻向門。此中付三作願門有レ二。一、緣事四弘誓願、二、緣理四弘誓願。次就三觀察門有レ三。一、別相觀、二、惣相觀、三、雜略觀、此中有三雜略觀、有レ三略極觀。次就三助念方法有レ七。一、方所供具、二、修行相具、三、對治懈怠、四、止惡修善、五、懺悔衆罪、六、對治魔事、七、惣結要行也。此中就三修行相具有レ四修、有三心。四修者、一、長時修、二、慳重修、三、無間修、四、無余修也。三心者、一、至誠心、二、深心、三、廻向發願心也。次就三止惡修善有レ五因緣。一、持戒不犯、二、不起邪見、三、不生憍慢、四、不恚不嫉、五、勇猛精進也。次就三別時念仏有レ二。一、尋常行儀。二、臨終行儀。次就三念仏利益有レ七。一、滅罪生善、二、冥得護持、三、現身見仏、四、當來勝利、五、弥陀別益、六、引例勸信、七、惡趣利益也。次就三念仏証拠有レ三重問答。次往生諸行門也。次就三問答料簡有レ十。一、極樂依正、二、往生階位、三、往生多少、四、尋常念相、五、臨終念相、六、龜心妙果、七、諸行勝劣、八、信毀因緣、九、助道資緣、十、助道人法。云云。以此名レ広也。(一九—二〇)

I	H	G	
<p>就^レ此^レ往生要集^ニ有^二三略要^一。広^ク者、此^レ一部三卷有^二三序正流通、厭離等^一十門束以名^レ広^ク。十門者、一、厭離穢土、二、欣求淨土、三、極樂証掘、四、正修念仏、五、助</p>	<p>問曰。十門次第造主定可有^レ其意、今何故末學稟^レ膚輒論^二開合之義^一、有^二何故^一耶。答曰。第三極樂証掘門之意、即積^二第二欣求淨土門之疑^一。謂^レ對^レ三十方及都卒、唯偏積^二成西方一義^一。故為^二一門^一。問曰。何故第五第六第七第八、合^レ之為^二一門^一乎。答曰。依^二正助、長時、別時、修因得果義^一、一往開^レ之雖^レ為^二五門^一、對^レ諸行、五門共是念仏、故、亦合^レ為^二一門^一。故序中云。依^二念仏一門、聊集^レ經論要文^一。云云。又第八念仏証掘門中、問曰。一切善業、各有^二三利益、各得^二往生^一、何故唯勸^二念仏一門^一。第九門初謂。求^レ極樂者、不^レ必專^二念仏^一、須^レ明^二諸行^一、各住^二中樂欲^一。序中言^二一門者、惣指^二一部十門之中所^レ言念仏^一、云^二依念仏一門^一。是則對^レ諸行論^レ之。第八念仏証掘門中所^レ言一門者、指^二上正修念仏已下四門^一、亦對^レ諸行云^二一門^一也。第九門初言^二念仏者、雖^レ無^二二門之言意、指^二正修已下五門^一云^二念仏^一也。是對^レ諸行亦云^二念仏^一。(一八一—一九)</p>	<p>二明^二三章門開合^一者、先開^二次合^一。先開者、如^二序中云^一、惣有^二三十門^一、分為^二三卷^一。一、厭離穢土乃至十問答料簡。是則開義也。次合者、前十門束為^二五門^一。謂^レ一、厭離穢土門、二、欣求淨土門、此門之中即攝^二第三極樂証掘門^一。三、正修念仏門、此門中即攝^二助念別時利益証掘四門^一。四、往生諸行門、五、問答料簡也。(一八一)</p>	<p>卷末、宝性論偈、正宗分也。三言流通者、下卷內題與七言四句偈、是流通分也。(一八一)</p>
△ 1	△ 3	△ 2	
3	3—4	3	
	○ 8	○ 7	
	373—374	373	
○ 1			
374			
△ 1	△ 3	△ 2	
379	379	379	
	<p>10. 一三〇上 9. 一二八下 8. 三七上</p>	<p>7. 三七上</p>	<p>6. 一五五下 5. 三七上 一五五上</p>

		A	B	C	D	E	F
善	往生要集 積 (昭法全ノ頁)	<p>將_ニ積_ト此_ノ集_ヲ準_レ積_ニ經_ヲ論_シ可_レ有_ル三_ノ門_一。一_者大意_二、二_者積名_三、三_者入文_ノ解_ヲ積_ニ。初_ノ大意_者、夫_レ法_性平_等、雖_レ離_ニ淨_穢、亦_レ復_不離_ニ染_淨緣_起、因_緣假_有。是_レ故_一。仏_勸厭_穢欣_淨。但_レ雖_レ厭_空厭_離欣_空欣_空、若_レ無_ニ其_レ行_一終_無所_レ獲_是故_修念_仏。求_ニ願_ス往_生是_レ其_レ大_意也。(一七)</p>	<p>二_積題目_一者、言_ニ往_生者_一、草_菴限_目之間_一、便_是蓮_台結_跌之_程。即_從彌_陀仏_後、在_ニ善_薩衆_中、一_念之_頃得_レ生_ニ西_方極_樂世_界。故_言往_生也。(一七)</p>	<p>次_要者、此_集中_雖有_ニ念_仏諸_行二_門、而_以諸_行不_レ為_其要_一。即_以念_仏為_ニ往_生要_一故。(一七)</p>	<p>序_云。依_テ念_仏一_門聊_集經_論要_文。第_八念_仏証_掘門_亦不_レ如_下直_辨往_生之_要。多_云中_念仏。又_云。明_知、契_經多_以念_仏為_ニ往_生之_要。依_レ此_等意_一、要_之言_唯局_ニ念_仏不_レ通_ニ諸_行。(一七—一八)</p>	<p>次_集者、広_依經_論撰_集念_仏往_生之_文、故_言集_也。此_集有_ニ上_中下_一、故_言三_卷上_一耳。(一八)</p>	<p>三_入文_ノ解_ヲ積_者、此_有三_意。一_者、分_別三_段。二_者、明_ニ章_門開_合。一_分別_三段_一者、言_ニ三_段者_一一_序分_二、二_正宗_分、三_流通_分、一_序分_者、初_自夫_往生_極樂_ニ至_ニ于_備於_廢忘_一矣_者、是_レ序_分也。二_言正_宗者_一、自_大文_第一_至三_下</p>
本	略料簡 昭法全ノ頁	△ 1 14			△ 1 10		
正	料簡 昭法全ノ頁	△ 5 4	△ 4 4	△ 4 4	△ 5 4	○ 5 373	○ 6 373
德	大綱 淨九ノ頁						
版	略料簡 淨九ノ頁			△ 4 380	△ 5 380		
	註要 淨九ノ頁						4. 三七上
	往生要集 淨全ノ頁				1. 三七上 2. 二九下 3. 一三〇上		

法然上人の『往生要集』観

服部正穂

序

坪井 俊映 「一向専修の形成について―往生要集積と無量寿経釈を中心として―」『福井博士頌寿記念、東洋文化論集』六七四頁。

後期説

赤松 俊秀 『続鎌倉仏教の研究』二一九頁。

石田 充之 『鎌倉仏教成立の基礎研究』一一―一二頁。

石田 充之 『選択集研究序説』四五―四六頁。

2 古本四書の前後

末木文美士 「源空の『往生要集』釈書―その撰述前後をめぐって―」

『日本印度学仏教学研究』四十七号、一四二頁。

3 新本（正徳版）の義山改ざん説

藤原 猶雪 「徳川時代における法然上人漢語灯録の改竄刊流」

『日本仏教史研究』六三八―三九頁。

※

1 末疏の選述時期

初期説

石井 教道 『昭和重修法然上人全集』、序、四頁。

一、末疏対照表